

ミッションウォーカー Mission Walker

vol.3
2012.3

震災から一年、
被災地は今...

あなたの届きたい人は
どこにいますか？

フィリピン南部
災害支援

毎日かあさん
米さんの信仰生活

PHILIPPINES

洪水災害支援

国境・海・陸・言語および時間を超え、今回のCCMNチームは1月15日午後4時にフィリピン現地に到着しました。この短い期間を振り返ってみても、カガヤン、タゴアロアン、ミサミスオリエンタルにおいて、すでに600人以上の人達に仕えてきました。ネットワークを通して災害初期以来多くのクリスチャンや教会が必要に応じ、国際災害対策ネットワークの働きを、祈りや経済的な支援により支持してくださっています。その一環として、近日2012年1月25日にチームが到着し、被害を受けた地域社会や現地の家族を助ける目的で働きました。

チームはフィリピンで、短期間にもかかわらず、非常に多様な働きをしました。

彼らは多大なインパクトをもたらしました。様々な場所へ周りながら、カウンセリングや祈り、医療ミッションに治療介入、仮設住宅訪問、被災者の方々の話を聞くこと、支援物資の配布、仮設シェルター、“台風センドン”(21号)による洪水によって泥水の入ってきた家の掃除等、彼らの提供できる全てをもって仕えました。

IDRN(国際災害救済ネットワーク)カガヤンチームと一緒に、見放されているイスラ・デルタとイスラ・デ・オロの地域を訪問しました。空家、壊れた家屋、洪水の残骸、2011年12月16日の夜まさに“台風センドン”が被害をもたらしたそのままの状態に遭遇しました。以前は多くの人たちで賑わっていた事を思いだし、破壊的な洪水の後、活気で溢れていた町が、人気のない寂れた町になっている現状を目の当たりにするだけでした。



共同ボランティアチームは医療を通して奉仕し、被災者たちは、無償の医療支援を受けるだけでなく祈りや、薬、理学療法士による治療も受けました。共同ボランティアチームは多くの素晴らしいコメントを貰い、奉仕している側も元気づけられました。

2012年1月28日、とてもユニークな形でのミニストーリーが行われました。キャラナンにあるテント設営地を訪問した時に、言語の壁がある中、チームはテント地の国内難民の人々に細心の注意を払いトラウマカウンセリングを行いました。各通訳者と共に、恐ろしい経験をした人たちに関わる為に、2人組で各テント訪問してまわりました。一箇所ずつ少数で訪問することで、訪問したチームメンバーに心を開いて自由に分かち合う機会を与えることができるからです。フロラとウキは、地元の通訳者ディクシー・バンタグ、ハニー・バンタグと一緒に、猛烈な台風センドンによって長子を失ったご夫婦を訪ね話を聴くことができました。この家族が台風が来た夜、どのようにして生存されたのかを聴いた後、この夫婦は父親が3人の内2人の子供を抱え、母親がすぐに激しい流れの水の中を懸命に超えようとする中、行方不明になってしまった残りの1人の子供を抱えていたことがわかりました。

洪水以来、40日以上時間が経過しているのにも関わらず、この夫婦にとっては鮮明な出来事でした。涙が彼らの目から溢れる中、今まで彼らの内にあった痛みが解き放たれているようでした。そして、この夫婦との思いがけない出会いの後、特に母親の内にあったどうしようもなかった特別な感情がリリースされ、夫婦共、慰めと休息を神様の約束の中に見つけることができたのです。

色んな国から参加した人達は、台風によって被害を受けたフィリピンの人々に仕えるために、一緒に働くことができました。CCMNチームの存在は、共にパートナーやボランティアとして働いた人々に変化を与え、CCMNチームが滞在中に訪問した各地域においても変化をもたらしました。チームは台風センドンによって引き起こされた鉄砲水によって被害を受けた人々に真の愛とケアを示すことができました。



MISSION IN TOHOKU

2012年3月

第3号

MISSION WALKER
from
SAGA imari's
angels
電話
(123) 456-7890
FAX
(123) 456-7891

震災から一年、被災地は今...

2011.3.11の東北大震災から一年が経とうとしています。被災地はどんな状況になっているのでしょうか？

津波で流された地域には、仮設店舗が建ち、被災者やボランティアの現地での活動に貢献しています。ただ、地域によってばらつきがあり、特に田舎は復興も後回しとなっているようです。

被災者の方々は、今後の生活、特に新しい家や金銭的なことに関して大きな不安を抱かれています。仮設住宅の期限は残り一年。経済的に余裕があれば、新しい家を建てられますが、そうでない人も大勢います。*災害公営住宅もありますが、土地も戸数も足りていない状況です。

また、被災者の心のケアも必要と言われています。震災被害を必死で受け止め、頑張って乗り越えてきた被災者の方のストレスが徐々に表面化しているのかもしれない。保健師さんが定期的に回っているそうですが、その支援も十分ではないそうです。助けを必要としているひとりひとりに行き渡るような、継続した支援が求められます。

経済面では、昨年の11月ごろから漁師さんたちは船を手に入れ、すでに漁業を再開した人も多いようです。ただ、漁獲量は例年より少なく、魚介類の値段も高くなっています。カキやアワビ漁等は5年くらいたたなければ結果が分かりにくいとのことで、依然厳しい状況には変わりありません。*災害公営住宅...自然災害で住宅を失い、再建できない被災者が住むところ。

県や市町村が国の支援を受けて建設し、仮設住宅を出た被災者が比較的低家賃で住むことが出来る。



STM from HongKong



They need peace,
hope, and love.
keep praying
for them...



MISSION IN TOHOKU

震災直後から被災地復興支援を続けてきたクリスチャンたちは、日々の地道な活動の積み重ねの中で、神様が働いて下さる体験をされているようです。以前は被災者の方の話を聞くことが主でしたが、今では一緒に聖書を読んだり、ただ一緒にテレビや新聞を見たりして時間を過ごす中で、支援者と被支援者の関係ではなく、本当の友人、家族のような関係が築かれ、ご家族3人の方がイエス様を信じて救われたそうです。ハレルヤ!

今後ますます主の祝福と希望が東北の地、さらに日本中に満ち溢れます様に。

◆お祈り◆

被災地に居る方々のご健康が守られ、寒さにも負けず体調が守られますように。
東北支援や宣教の働き、宣教師と被災者の方との個人的な関係が祝福されますように。

KEN INOUE



昨年の5月、クリスチャン仲間と岩手県へ行きました。避難所のある女性のことが深く印象に残っています。彼女は誰とも話をせず茫然としていました。岩手宣教チームの一人が、折り紙の花を折り、花が開くところを彼女に見せると「きれい」と言って泣き崩れ、そのチームメンバーも泣きながら彼女を抱き締めました。ただ寄り添う、気持ちを共有する、ということが、彼女にはどれほど力強く、必要だったか考えると、僕は胸が熱くなりました。今も多くの人が彼女のように、悲しみや苦しみの中で孤独と闘っています。東北で、そんな人たちと家族になり、一緒に歩みたいと思うようになりました。僕は今年大学を卒業します。今の時代新卒で就職しないと厳しく、周りの人に反対や心配をされる度に不安になり、就職しないでいいのか悩みました。でも今必要がある、神様が守ってくださると信じ、また、いつも“神様

に従いなさい”と応援してくれる両親の理解、これから東北で共同生活をする東北の宣教師夫婦の励ましと促し、多くの兄弟姉妹の祈りの支えによって決心することが出来ました。本当に感謝です。東北に行くもう一つの大きな理由は、宣教師夫婦との共同生活を通して神様が僕たちに命じている弟子訓練を受けることです。神の国の価値観や宣教のスピリットを学び、自分の人生に与えられたビジョンを知るために大切な時期だと感じています。共同生活の中で愛、励まし、忍耐、へりくだりといった神様のご性質を身につけたいです。生活面でも神様に信頼しなければいけません。生活費はアルバイトで賄い、被災地とアルバイト先を行き来する生活で心身ともに守られるように神様に委ねます。期待することは、震災で心身疲れた人たちが神様であって希望を見出すことです。僕はちっぽけで何が出来ても分かりません。だけど僕は神様を知っています!神様が救ってくれました!!神様の愛はすべての解決です!!この素晴らしい知らせを届けたいです。嬉しい知らせを東北チームから聞きました。5月に避難所で出会った女性が神様を信じ受け入れたのです!!これ以上嬉しいことはありません。女性は決して裏切ることのない、揺れ動かされることのない、本物の希望に出会ったのです。ハレルヤ!! “今このとき”に東北に働き手が必要だと感じています。僕は弱いですが、僕の内側に住んでおられる神様は計り知れない愛で、働いてくださいます。ただ神様に信頼し、希望を届けに行きます!“神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。”ピリピ2:13

ERIKA NAKAJIMA



なぜ東北へ行くことに決めたのですか?—初めて、Jesusと出会ったのは高校生の時でした。それから、7年Jesusと歩んで来て、人生が180度変わったと思います。喜びや幸せの経験はもちろん、時にはチャレンジな時もありました。そんな時でも、何事にも神様を頼れたので心は穏やかでいられました。今、東北では多くの人が希望を探していると思います。そんな中、少しでもJesusの愛を知ってもらいたいです。そして、希望と平穩に満ちた人生を歩んでほしいと思います。

東北でしたいことや、期待していることは?—“ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。”ヘブル10:25 この1節のように、東北の皆と一緒に集まって、励まし合い、支え合い、成長できるあたたかいコミュニティーを築きたいと思います。

今、東北ではクリスチャンの数は少ないです。でも、復興支援を通して多くのクリスチャンがJesusの愛を届けています。何年か後には東北の皆が日本全国や世界中の人達へとJesusの愛を届けている未来になっていたらいいな—と思います。そんなことを期待しています。

今の気持ちは?—初めて親元や友達から離れるので緊張しています。でも、いろんな人たちとの出会いと新しい発見があると思うと楽しみです。

主婦米さんの、非凡な毎日

～神様に言われたことだから、やれば楽しいのよね 笑～

里親になろうと思ったきっかけ

は？— 社会問題となってきた犯罪の低年齢化や虐待の増加を知った私は、教会の近くにある児童養護施設に随時受け入れをするボランティアを申し出ました。やがて週末里親に発展した頃、一人の県職員から施設の中で重篤な障害児の受け入れの相談を受けました。そして私に里親になって受け入れて欲しいと伝えてくれたのです。私は悩みましたが神様の答えは詩編68：05と箴言3：27と明確でした。

里親をすることで、神様の祝福を感じたことは？

— 神様は子どもたちに触れ、癒し 解放し 救って下さいました。ある子どもは、自傷行為が癒され落ち着いて生活できるようになり、今は神様の為に役に立つ者になりたいという願いのもと、毎日励んでいます。来たとき引きこもり気味だった子どもは、神様を知って元気になり、今は学校の友達をケアしています。

また、他の子ども達にも信仰を与えて下さり、巣立った後もたまに会って祈り合います。また里親を通して、様々な人との接点が広がりました。その方々との交流がプライベートにまで及ぶとき、求道する方や信仰告白する学校の先生も起こされました。更に神様は私自身の内面を訓練し、成長へと向かわせて下さっています。里子たちとの基本的信頼を築き直して行く中で、愛着関係の為に必ず通る子どもたちの「試し行動」がその都度私の内面を探り、私の考えと思いを神様へと向かわせ、より純粋にさせてくださるのです。大変な戦い(罪と肉)も経てですが…。その勝利の

喜びと自由さはどんなに感謝しても感謝しても尽きないものです。本当に幸いです。

これからやっていきたいことは何ですか？

— 自立支援支援護寮のような働きが必要だと感じています。大抵の養育里子たちは18歳で社会に出ます。その多くは生活面や職場の人間関係で挫折したり、異性交遊でドロップアウトしたりします。その倒れ方はひどいのです。それに対し支援として、NPO団体が寮を提供していますが、十分な数では無く、許容年齢は二十歳まで。私は、主にある支援支援護寮を願っています。もちろん衣食住の支援による自立訓練の働きは必要ですが、もっと一人一人がメンタリングされていき、それぞれが主のみ声を聞いて神様のもの、弟子となり社会や世界に遣わされる者となるような働きができないかと思っています。

Mission Walkerを読まれた人へ

豊かな日本でありながら虐待は少しも減らず、むしろ増加の一途にあります。里親の啓発運動は展開しているけれども、まだまだ里親に対する認識は浸透していないので、家にこだわる思想故か誤解も強かったり、「自分には出来ない」と決め込む人が多いのが現状です。密室性の強い虐待の被害者は弱い立場の子どもであり、命の危うさの中でも親を慕う子ども達は泣きながら本当の愛を求めて叫んでいます。また、親へのサポートも必要です！根本的には、福音により神様の心に満ちた国にならないと思います。



柏原 米 (かしわら よね)
1952年生まれ
香川県在住。

家族の病気をきっかけに、神様、救いについて考えるようになり、クリスチャンに。それまで児童福祉に全く関わったことがなかったが、近所の児童養護施設にボランティアに行く中で里親することを決意する。

2004年から、これまでに25人～30人の子どもを里親養育しており。現在も2人の里子と生活し、別に週末里親としても2人預かっている。

夜中の警察、実親からの攻撃…里子を預かることで、大変なトラブルに巻き込まれることもあるが、あきらめることなく、傷ついた子ども達を神様の愛で愛してケアし、サポートし続けている。

自分にできることを通して神様に素直に従い、毎日を楽しみながら生活しているステキな女性。